

口・手・足から連想される英語動詞群の意味分析

| | |
|-----|---|
| 著者 | 伊藤 幸一 |
| 出版者 | 法政大学教養部 |
| 雑誌名 | 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 |
| 巻 | 61 |
| ページ | 59-72 |
| 発行年 | 1987-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/4622 |

口・手・足から連想される 英語動詞群の意味分析

伊 藤 幸 一

は じ め に

口・手・足と記したけれど、顎・腕・脚などと付記した方が理解し易いか。それ相応の破壊力を持ち、かつ自由に動かすことが出来る、これらの身体部位から連想される英語動詞群の意味分析を通して、人間の基本的所作・動作・行為・行動といったものにかかわる、いくつかの意味場を解明したいと思う。

思考・感情といった内的なものは、言語行動及び肉体行動として外的に表出する、と言う因果関係は別としても、対立関係を見て取ることには異論はなかろう。言語行動は口を、肉体行動は四肢、つまり手・足を連想させる。本稿が対象とするのは、いわゆる行動と呼ばれる後者である。

ところで、その原点を、他の動物に取って考えて見ると⁽¹⁾、生きることの始まりであり、全てであると言っても過言でない、食物の摂取であり、調達である。ときには、テリトリーを含め身を守るべく外敵と戦うこともあろう。重要なのは口で、威嚇の唸り声を発することも含め、武器、道具となる。足も同様で、更に移動の役割も担う。

人間の場合は直立歩行が故に、「手持ちぶさた」が手の器用さを発達させ⁽²⁾、口と足の機能を多少奪ったのではないだろうか。そこで基本的な肉体行動としては、口を考慮する方が良いし、そのことで隠れていたことが解明されるならば、そうすべきであろう。

一方、口を連想させる英語動詞としては EAT・DRINK あるいは SPEAK・TALK が代表として挙げられ、外なる飲食物からの内への栄養摂取が前者で、内なる感情や思考の音声による外への吐露が後者である旨、既に指摘したことがある。後者は別としても、前者は肉体行動として、口との関連だけでなく、

四肢と共に扱うべきではないのだろうか。

このような視点から、まずは『口』『手』『足』を設定して、特に具体的、物理的側面に関して連想される英語動詞群を意味分析していく。いくつかの意味場が指摘できるし、示唆できる。更に『口』『手』『足』の延長線上に、あるいは抽象化することで、大小の別の意味場が、また、いくつか見え隠れするので、その概略も『まとめ』でみる。今後の調査・研究の出発点としたい。

口

はじめに述べたように、連想されるのは EAT・DRINK である。後者は飲物、つまり液体を、前者は、それ以外を摂取することであるが、他の表現と共に、より具体的に考察してみよう。

《咀嚼》最も普通に、個体を対象に考えてみると、左程の大きさでなければ、手を介して口に運ぶだけで良いが、大きい場合は後で、一回あるいは二、三回、上下の顎を合わせ BITE し、適当に切る必要がある⁽³⁾。柔らかいものならば歯と唇かもしれないし、硬ければ、前でさばけず、少し奥で行なうかもしれない。更に、対象物は口の中で、顎の連続的上下運動で CHEW されることになる。チューインガムを連想するか。噛み砕かれ唾液と混じると、少しずつ自然に、喉の奥へと送り込まれる。細かく砕かれないままに、意識的に飲み込む場合もある。どちらであれ SWALLOW が適用される。強調的なので、特に嚥吞みが連想されるけれど、より広く適用され、液体を含め、喉を通過させることが本義である。

この段階で EAT が適用される。液体に対しての DRINK もしかり、口に入れた後、自然のままに、すぐ喉を通過させることであろう。しかし、ときとして、その液体に対して EAT が推奨されるが、口内に一度溜めて、顎の上下運動で唾液と混ぜた後、喉に送り込むことであろうか。スープに対して適用される EAT は、これであるとも解釈できる。それ故か、EAT は CHEW のことであるとする考えも出て来るが、一度 CHEW した後、口から出して幼児に与える場合を考えてみれば良い。ところで、一度喉へ送り込んで後、口へ戻して RUMINATE する場合は、どう解釈するのであろうか⁽⁴⁾。

飲食物摂取において、CHEW は重要であることが了解されるけれど、仲間を挙げることができる。しっかり噛み砕き、搗り潰すことを強調すると MAS-

TICATE となるか。対象物にもよるけれど、音が伴なう程激しく顎を動かしているのは MUNCH である。どちらかと言えば、その音を強調しているのが CRUNCH であろうか。GNASH は感情的なことで、歯を激しく軋らせることであるが、激しく CHEW することに対しても適用されるようだ。ついではながら、歯を力一杯食いしばるのは CLENCH である⁽⁵⁾。

BITE に関しても、仲間として、音を強調した SNAP を挙げられる。ロ一杯、大きく開けて激しく BITE すれば、音が伴なうだろうか。大きく一気に行なっても破壊力はあるけれど、力強く小刻みに、時間を掛ければ、固いものも削れるだろうか。鼠のような齧り方で、子供が爪を咬む様にも適用され、GNAW と言う。ついではながら gnawer は齧歯類を意味する。同様だけれど、どちらかと言えば、激しさが少なく、ゆっくり行なうのが NIBBLE であろうか。魚が釣針の先の餌を、様子窺いに、表面だけ齧る様にも適用される。両者とも表面的で、かつ同じ所に標準を合せているが、その都度、違った所を少しずつ啄むと、鳥の嘴を連想させる PECK が適用される。

まったく異質だけれど、表面的な接し方としては LICK も挙げられる。口に入らない程大きい、あるいは棒状の餡などに対して、舌を出して唾液で溶かしながら嘗めることで、対象物が口の中に入った場合でも、しゃぶっていれば、やはり LICK である。犬や猫が自分の身体に対して行なうのを良く見掛ける。湿った舌先で、粉あるいは粒状のものを付着させ、口の中に導入する場合、蛙などの虫の取り方を連想させるが、PECK のようにも思えるし、LICK か、それとも次に示す LAP だろうか。

犬や猫が、ミルクなどの液体を、舌を出しては付着させ、ピチャピチャ口に入導入するのが LAP である。子供が真似て嘗められることがある。人間の場合は、手で容器を傾けて、口の中に注ぐことができる。吟味のためか、それとも賞味のためか、口の中が濡れる程度に僅か注ぐ場合、SIP が適用される。同様な SUP という表現もあるが、特にスプーンを用いて注ぐ場合に適用されるか。

その際に吸い込むことも行なわれる。ストローなどを使って吸い上げる場合もしかり、SUCK と言う。口を窄めた方が上手く行くが、典型的なのは、液体を含むスポンジ、水分の多い果物などに対して行われる。LICK 同様、口の中に入った物に対しても適用されることは言うまでもない。原理的には、吸い

込むことなので、液体以外の粉、豆粒、ヌードルなど、更に気体さえも対象物となりえる⁶⁾。川面から、直接水を飲もうとするならば、既述の LAP か、この SUCK をせざるを得ない。乳幼児が母乳を吸う場合は、原理的には当てはまるけれど、特別に SUCKLE も適用される。

以上、飲食物ばかりを対象にしたけれど、その限りではないことは言うまでもなからう。また、どれも喉に送り込むことを暗示するが、これもしかり、その限りではない。つまり SWALLOW を含むのは、EAT・DRINK だけである。ついでながら液体は、個体を咬み砕いている際中に、喉の通りを良くするために注がれることがあるが、どちらの表現が適用されるのであろうか。

余りの喉の乾きに、あるいは舌でなく喉で味わうべく、一気に液体を流し込み、喉を鳴らす程の飲み方は GULP である。ガブ飲みとして豚が残飯を平らげるような感じだからであろうか、SWILL が口語的に適用される。GUZZLE も仲間に加えられ得るけれど、液体だけではないかもしれない。境界線をどこで引くのか厄介だが、液体以外を貪り食う場合は DEVOUR も挙げられる。特に空腹であったり、急いでいたりで、がつつ音を立てる程の勢いで食べると、七面鳥の鳴き声を連想させるのか GOBBLE が適用される。

どれも音を連想させるし、腹一杯は別としても、多量に取ることが暗示されるが、特に食物に対して、両方の意を含む GORGE という表現もある。また鰯腹詰め込むことを強調すると CRAM とか、更に STUFF が適用されるか。ここまで来ると、物理的なことではないけれど、喉より先の化学的なことについても言及せざるを得ない。

《摂取》 胃腸で DIGEST 消化して、かつ ABSORB 吸収して、栄養として ASSIMILATE 同化する。どれも広い意味を持っていて、相互を暗示しあうけれど、摂取としては INGEST、特に飲物の摂取、更に吸収、同化としては IMBIBE も適用される。

恐らく飲食物摂取は、満腹感を得たり、生体の維持のために栄養を取るだけでなく、舌で味わい楽しむことも含まれる。「行ける」かどうか試してみる意も含むのが TASTE で、文語的に賞味するのが SAVO(U)R で、まさに味わい、楽しむのが RELISH である。

毎日の食事は、健康的に規則正しくと言われるけれど、特に夕食を取るのには SUP である。特に夕食の場合にあてはまるわけではないけれど、豪華な食事

を正式に食する場合は DINE が適用される。一般的に食事をするのには EAT が適用される。それより、食物の前に座っていれば、多分 EAT が連想される、と広く考えた方が良いか。より広い意味を持つ TAKE あるいは HAVE も適用されることを付記しておく。両者は、その広い意の本義として、実は手を連想させる。

手

TAKE, HAVE からは、手は握る力を持っていて、それが発揮された状態、つまり対象物をつかみ、所持することが連想される。しかし体のどの部分にも転用される上、抽象的に自分の一部の如く対象物をすることも意味する。飲食物に対してなら、手を介して、物理的に口の中に取り込むだけでなく、化学的に吸収して、その人の一部にすることを言う。しかし、より理解を深めるために、これらの仲間と共に検討し直してみよう。

まずは対象物として、注目を集めるだろう動いているもの、あるいはその可能性をもつものに関して考察すると、その動きを止めることを強調したのが CATCH である。すぐに動き出して、手を離れてしまうかもしれないが、今は一時であれ、保持していることを強調したのが HOLD である。動きがあるかどうかには関係なく、どこかに存在していたものを、手を出してつかむことを強調したのが TAKE である。一方、どこにあったかには関係なく、今は手の中に所持していることを強調したのが HAVE である。CATCH, TAKE の結果か、あるいは偶然、受動的にそうなったのか、どうであれ、手に入ったことを強調したのが GET である。HOLD であれ HAVE であれ、その状態を、しばらくの間維持すると KEEP であろうか。CATCH・HOLD, TAKE・HAVE, GET・KEEP の三対の表現は、躍動性、積極性等の差異はあるけれど、比例式が成り立つように思える。しかし、これらは手や腕だけに関与するだけでなく、他の身体部位にも適用され、更に抽象的な意も持ち、分析は容易ではない。そこで、これらの出発点となる、より具体的、物理的側面にかかわる表現を考察してみよう。

《握力》 手は、はじめに述べたように、器用さを以って特徴とするけれど、基本となるのは握力であろう。口で言えば上下の顎に相当することになる。口では下顎だけが動くが、手では5本の指が自由に動き、相互に押し合う。この

ように握力を話題とするなら、そのものズバリの GRASP を、まず挙げざるを得ない。対象物によって、力は適宜加わるけれど、ごく普通に握っている状態を言う。一方 GRIP は、しっかりと強く握ることで、指の腹あるいは掌が、対象物に密着している状態を連想させる。両手でも良い、対象物が離れないように、更に強く、急激につかむのは SEIZE であろうか。対象物は動いていた、あるいは動く可能性をもつ。

つかむだけでなく、腕の力も加わって、手前に引こうとする TWITCH と言った感じの場合もある。対象物に対抗する力があったり、つかむ方に得ようとする気持が強いからであろうか。まずは CLUTCH で、更に強くは SNATCH であろうか。GRAB は強引に引たくることになる。ついでながら、しっかりと握って、咬みあうような力が加わっているのは SQUEEZE で、捻ったり、絞ったりである。CLASP も同様で、両手を指の間で組んだり、握手の意もある。両者とも、手だけでなく腕を絡ませる場合も含むようだ。

明確に腕の中、あるいは胸の中を連想させる表現もある。当然ながら、凡そ両手あるいは両腕が関与すると思われる。対象物を、文字通り、腕を折り曲げて囲むことを強調したのが (EN)FOLD であり、言わば腕の中に抱きかかえているのが EMBRACE で、特に熊のような強い力が加わっているのが HUG である。これらに握力は直接かわからないけれど、握力同様、内側に取り込もうとする力が加わっているとみることが出来るので、ここで言及した。力が、これとは反対、つまり外側に向けられる場合を次に考察する。手というより、腕にかかわると考えた方が良いか。

《腕力》 外に力向けるとなると、まずは手を伸ばすことになる。STRETCH が適用されるか。広い意味を持ち、身体全体など、縮まっているものを広げることである。REACH は手を伸ばすだけでなく、対象物に手が届き、更にそれをつかむことをも意味する。

そこまで行く前に、まず触れる TOUCH ということになるか。指先が最も敏感なので、対象物の感触を試すのに使われる。特に人差し指は toucher とも呼ばれたことがあると聞く。指の腹、掌、更にどの部位にでも適用される。しかし感触を試す場合でも、ある程度の力を加えざるを得ない。ある程度を越すのと PUSH あるいは PRESS と言われる。ゆっくり圧力を加えると PRESS⁽⁸⁾ で、弾みをつけると PUSH である。対象物が移動する場合もあろう。急激な、

強烈な弾みを強調すると SHOVE あるいは THRUST が挙げられる。(両)掌、肩など、身体全体を使つての場合もある。

力を真直に加えるのではなく、横に滑らせて、押さえるように強く加えるのが RUB であろうか。まったく力を抜いて、軽く触れる程度で、特に手の内側を一方向にゆっくり滑らせると STROKE である。瞬間的にサツとなら、まだ TOUCH であろうか。

STROKE と対になるか、手の内側で、手首の力を抜いて、柔らかく押さえるように叩くのは PAT である。同様に、ただし軽く弾みをつけて打つのが TAP で、肩など注意を促すために叩く。特別な靴を履いての足によるタップ・ダンスをも連想させる。TAP と同義のようだが、特に自分の掌を対象に行なうと、つまり拍手には CLAP が適用される。ついでながら手の甲などを使つて、少し硬い音を発すると RAP と言う。

強く叩くには腕も参加することになる。いわゆる平手で強く打つと SLAP で、特に頭や顔を張ると CUFF であり、頬だと BOX が適用される。一戦交えそうな雰囲気となる。お尻には SPANK であるが、子供を叱る場合に使われる。ついでながら、更に強烈な拳を使った場合、一般的に PUNCH が適用される。THUMP は、それに伴う音を強調していると言った方が良いか。

打つ強さにも幅があり、手の内側や外側だけでなく、広く適用され、抽象度の高い表現もある。狙いを定めて行なうことを強調したのが HIT で、それには関係なく、結果としてぶつかったことを強調したのが STRIKE であり、弾みをつけているのが KNOCK であり、早く繰返されることを強調したのが BEAT であろうか。大部分が音を連想させるけれど、特に繰返される強い音を連想させるのは POUND である。

上述の PUSH において、僅かに対象物の移動に触れたけれど、延長線上に乗るだろうこと、つまり、手を伸ばして外に力向けると共に、手中のものを離すことも、話題にせざるを得ない。一般的には THROW が適用されるだろう⁹⁾。ゆっくりと対象物の動きを追える程、軽く山なりに放るのが TOSS であろうか。狙いをつけて投げんことを強調したのが PITCH であり、同義のようだが、対象物が遠くに放たれるのではないかと思わせるのが HURL であり、勢い、力が入り、対象物が空を切って早く飛ぶのが FLING であろうか。SLING は、どうしても具体的な石とか、あの道具を連想させる。対象物

が手から離れることを強調したのが CAST であり、捨てるといった意も出てくる。そして対象物が、どこかに強くぶつけられることを強調したのが PELT ではないのだろうか。両手を含めた手中だけでなく、ときには腕の中に抱かれていた対象物もあろう。

《器用》 今迄言及のなかった爪を立てて引っ搔くのは SCRATCH である。5本指で物をつかむようにしてなのか、それとも人差指だけでなのか、爪が伸びていることもあろう。親指と主に人差指とであろうか、神経が行き届いていないと、爪を立てて、あるいは指先で、小さな、細かな物は挟めない。口に関しての BITE にも関連するか、強く挟むことを強調したのが NIP である。明確に爪、指先を強調しているのが PINCH である。挟むだけでなく、捻ることも加わると TWEAK となるか。急激に強く引っ張ろうとして、逆に強く挟むことになるのが WRENCH である。

ここで引くこととして PULL を挙げざるを得ない。既述の PUSH と対立するとして、既に言及されてしかるべき表現であり、小手先だけでなく、広く適用されることが推測されるだろう。どこかに付着、接合していたものを、引っ張ったり、捻ることで切り離すことを PICK は意味する。PLUCK は、より明確に、手でしっかりつかみ、急激な力を加えて引き抜くことに適用される。

以上、力が内側に向いていると解釈でき《握力》でも扱かうことが可能かもしれない。以下は、その逆で、力が外に向いていると解釈され《腕力》で扱えるかもしれないものを示す。好対照ではあるが、やはり、末端まで神経が行き届いていないと行なえないように思える。

爪で、あるいは指先で外側に弾くのが FILLIP である。指先等で払い退けることを強調したのが FLIP で、ここに加えて良いか。POKE は指先だけではないけれど、突くことを意味する。今迄言及のなかった肘を、むしろ連想させるか。明確に、外に向かって肘を軽く突くのは NUDGE である。注意を促すために使われるか。また、そのものズバリの ELBOW は、肘を頼りに、雑踏などを掻き分けて進むことである⁽¹⁰⁾。

ここまでは一応、単純化して、内・外という力の方向を指摘したが、複雑で器用な動きもある。腕を上げて、既述の PAT のようにする、つまり手を軽く開いて外側に向け、手首を上下あるいは左右に振ると WAVE である。人差指だけ立てて拳を外に向け、動物が尻尾を振るように、手首を左右に振るか、

人差指自身を揺り動かすと WAG が適用される。それぞれ身振りとしての意味を持つ。

手首や指や腕の関節を柔軟に使うて対象物をグルグル回転させたり、振り回すのは TWIRL であり、バトン・トゥワラーを連想させる。TWIDDLE も同様で、回したり、捻ったりでいじくることである。それぞれ親指に対して行なわれると、手持ちぶさたであり、暇であることを意味する。不器用な親指ではあるけれど、本のページを捲ったり、ヒッチハイクで車を止めるために立てて使われたりする。それらには、ズバリ THUMB が適用される。不器用に FUMBLE することも多いけれど、今迄言及した動きを含め、手は大小様々なものを扱う。広い意味を持つ HANDLE, MANIPULATE などが、それらに対して適用されるか。

足

手のような器用さはないけれど、足の裏の一部は、掌以上に敏感であり、腕力や握力には負けない強い脚力を持ち、全身を支えるものとして認識される。

《直立》 足の裏を支えにして脚を伸ばし、上体を垂直にして立つのが STAND である。膝を曲げて低姿勢になると SQUAT である。一般的に、腰を落した低い姿勢に広く適用されるようだ。明確に、膝を床につけて身体を支えるのは KNEEL である。腰を落せば少し楽であろうか。ついでながら、足はほとんど無用となるが椅子や床に腰を下ろし、お尻を支えに座るのが SIT である。安定しているけれど、動きが奪われる。決った席でなら SEAT が適用される。肩車や馬には両足を開かないと乗れない。STRADDLE, BE-STRIDE が適用される。どの場合でも、上体が垂直でなく、傾斜していると LEAN である。窓から、あるいは机の上に身を乗り出す場合のように、前方ばかりではなく、壁に寄り掛かれれば、後あるいは左、右にも傾くことになる。

ついでながら、どこかの関節でも曲げることは BEND であり、特に腰、背などを曲げ、前かがみになると STOOP で、CROUCH は、更に膝も曲げて、かがみ込んだ姿勢にも適用される。更に低く、うずくまった状態にも BEND は適用されるか。BOW は、どちらかと言えば、首を曲げ、頭を下げることであるが、腰や背の場合にも適用される。特に首を迅速に垂れると NOD である。ついでながら、何かが飛んできて頭にぶつかりそうになったとき、瞬間的

に首を、あるいは上体をすくめるのは DUCK である。身体を支える足の機能からは少し離れてしまっただろうか。原点に戻って、直立であることに伴う歩行について言及しよう。

《移行》 上体を一瞬だけ、支えることが出来ても、さほどの意義はない。上体を移動させることが出来て初めて、支えることが出来たことになる。言うまでもなく、一般的には WALK が適用される。片足を他の足の前へ出して行くことの繰返しであるけれど、その繰返しを強調した表現とみてよいか。一方、その片足を出すことを強調したのが STEP である。残った片足との開き、それも広いことを強調しているのが STRIDE である。一歩出した足を、踏みつけることを強調したのが TREAD である。元気が良くて踏みつけることもあるが、足が重くなっていることもあるのが TRAMP であり、かなり歩き続け、踏みつけないと、残りの足が前に出ないほどだと TRUDGE, PLOD などが適用される。ほぼ同じ調子の繰返し、それもゆっくりしていることを強調したのが PACE である。

既に歩くこと以外の意味成分を暗示するものもあるが、幼児のような歩き振りは TODDLE で、あひるのような WADDLE もある。同様にして定かでない歩き方は TOTTER で、やっと歩いているといった感じが STAGGER, REEL で、ついでながら、つまずいたのは STUMBLE である。明確に精神面を強調している表現もあり、気取ったり、威張ったりで STRUT, SWAGGER, 恥を感じてなのか、こそこそと SLINK, 急いで、ちょこちょここと SCURRY などが挙げられる。

歩く場合は、どちらかの足が絶えず身体を支えていて前進するが、弾みをつけて、速く送り出すと走ることになり RUN が適用される。猛烈に弾みを強め、より速めると DASH となるか。走っていても、逆にゆっくりペースを乱さず、歩くのに近い場合は JOG とか、TROT などが適用される。片足で跳んだらその足で着地、足を変えて、同じことを速く繰返すと SKIP と呼ばれる⁽¹¹⁾。一歩ずつ、大きく弾みをつけると BOUND と呼ばれるか。しかし、これは、この後の跳ねる仲間と考えた方が良いのかもしれない。

前進することよりも、一回の跳ねることを強調した表現もある。一般的には JUMP が適用されるだろう。軽く弾むのは HOP で、片足だけで、あるいは鳥のように両足揃えて連続的に行なうこともある。grasshoper を連想するか。

大きく、瞬発力を用いて跳び、浮いていることを強調しているのが LEAP であろうか。真上に跳ね上がるといった感じが SPRING で、反動がついて弾む BOUNCE はボールを連想させる。どれも着地の場所は上下、高低、遠近、様々であり、向こう側に越えて行く場合もある。特に支えを頼りに越える場合は VAULT とも呼ばれる。

《不器用》 歩く場合は当然、立っていても、座っていても、足は踏みつけを行なっているが、意図的にも、片足、両足問わず、行なえる。既述の TREAD を再び記すことになる。不器用にも間違えて、自分の足を踏むことがある。広い意味を持つ STAMP と、弾みをつけて踏みつぶすことも含む TRAMPLE を仲間として挙げておこう。

弾みをつけて跳び上がる際、瞬間的に強い踏みつけを行なっているけれど、どちらかと言えば、それには KICK が適用されるか。このように蹴り下げるよりも、蹴り上げる方が多く、一般的には、足裏の指のつけ根、甲、爪先、更に膝などで、急激に力を加えて、打つことを意図するが、ぶつかった場合は、腕力とは比較にならない程の破壊力を持つ。サッカーの選手は、強弱おりまぜて、足のあらゆる部分でボールを蹴り、自由自在に操ると言うけれど、元来不器用な足だからこそ、称赞に値するのである。

不器用な足ではあるけれど、足裏を軸にして SPIN したり、横に SIDLE して歩ける。後へも歩くことは出来るし、両足で物を挟むことも出来るけれど、特別な表現は見い出せない。獣類でさえ、前足で地面を引っ掻いたり、穴を掘ったりするのに PAW が適用されるのに、FOOT は歩く他には、せいぜい踊ることに適用される位であり、激しく動かせば、足首でも SPRAIN するのが関の山である。

ま と め

ここまでは口、手、足に関して、咀嚼 摂取；握力 腕力 器用；直立 移行 不器用と適当ではないかもしれない名称も含め、便宜的に分節し、なるべく物理的に意味分析してきたが、いくつかの別の意味場がその背後に、あるいは延長線に見え隠れする。既に言及した英語表現は、繁雑になるので、なるべく表記せず、いくつかの新たな英語表現を加え、それらをまとめてみる。

《攻撃》 はじめに述べたように、行動の原点には護身もある。攻撃された

ら、ある程度の反撃はせざるを得ないか。殴る、打つ、蹴る、引っ掻く、咬みつくだ、本稿で言及した大部分が関与する。これらに頭突きの BUTT や肩からの TACKLE など、更に棒きれを振り回し、石を打ちつけ、投げるなど、武器も加えられるか。闘争あるいは、特に格闘技などのスポーツに関する意味領域を連想させる。

《切断》 本稿で扱った口に関する表現は、対象物に力を加えて変化させることであると抽象化して解釈すれば、CUT, GRIND, CRUSH などと言い換えられる。手、足では BREAK, TEAR, STRIP 等が加えられるか。口、手、足の延長である石器から出発したナイフ、ハサミ、ハンマー等の道具や機械をも連想させる。切断、粉碎、破壊など、その逆の接合も含め、隠れていた意味領域が現われ出てくる。

《愛撫》 前二者とは対立することになるか。犬や猫が飼主の手を嘗めたり、軽く咬んだりするが、人間なら KISS が対応するか。掌で撫でたり、軽く叩くことで答えてあげるだろう。子供に対して、あるいは恋人同士にもあてはまるスキン・シップである。腕の中でやさしく CUDDLE, 幼児を膝で DANDLE, 寝てまでも SNUGGLE, 恐らく腕の中での CARESS, FONDLE などを加えて、愛撫にかかわる意味場とも呼べるだろうか。

《挨拶》 人との出会いにおいて、スキン・シップ以前の歓迎の合図と考えてよいか。握手、キス、抱擁、会釈、跪く等の GREET だけでなく、拍手、背中や頭を掌で叩く、手を振るなどは既述している。その他、精神面を表現する、例えば肩の SHRUG などのジェスチャー、あるいは表情に関する大きな意味場を考えることも出来るだろう。

《養育》 母乳を飲む SUCKLE は、どちらかと言えば、他動詞としての授乳の意が優越するか。やはり自、他動詞として機能する FEED を連想させる。食物を与え、満足させるだけでなく、栄養を考え、面倒をみて、大事に育てる NOURISH, NURSE, CHERISH となると、上述の CARESS などスキン・シップにかかわる意味領域にもつながって行く。

《知識》 飲食物に関する表現は、比喩的にか、知識の摂取にも適用される。更に、手でつかめた場合には理解を意味するし、ある考えを持ったり、主張する場合にも TAKE, HOLD などが使われる。いわゆる知識や思考に関する意味場とは重複、交差するのだろう。

《所有》 手の握力に基づく表現は、上述の知識の獲得・所有を含め、より広く抽象的な意味を持つことは既に指摘した。動物がテリトリーや獲物に対して執着するのと同様に、人間は、知識や具体的な物に対して、所有欲なるものがあるのだろうか。ACQUIRE, POSSESS, STORE の挙句、他の人に HAND, GIVE, DELIVER など、手離すことも行なわれる。更に BUY, SELL など、延長線上に存在するか。人を介しての物の移動とでも呼べる、大きな意味場も想定できるだろうか。

《家事》 手に関する RUB, PRESS, SQUEEZE からは、洗濯の WASH を連想させる。SCRUB, SCRAPE など表面を擦って磨くことも、更に CLEAN, POLISH, SHINE など、連想させる。台所用品、家具、大工道具など、更に衣食住にかかわる意味場が見えてくる。

《芸術》 手の爪による SCRATCH は殴り書きをも意味する。鉛筆を持ったことのない幼児は、引っ掻いたような楔形文字もどきを描く。ペン先が引っ掛かって、彫刻刀のようににはならないか。上記の SCRAPE など、交え、弦楽器を掻き鳴らすことにもつながらないか。音楽、造形芸術、美術、更に、飛躍するだろうか文学までも含めた意味分野を連想させる。

《対処》 手に関しての HANDLE は、物理的な物を扱うばかりではなく、抽象的な状況、人間関係などにもかかわる。何事につけ、落着いて、冷静に対処できるようにとは、誰でもが求めることである。余りにも漠然としているが、例えば MANAGE などにかかわる意味領域を想定できるか。

《振動》 足で上体を支えるということは、歩行までも含む。上体が揺れ動いても座り込まず、目の前で何が起きても尻込みせず立っていることも STAND は含むのなら、耐える意も出てくる。SHAKE, TREMBLE, QUIVER などの身体の振動や、既述の SPIN などを含めての TURN を連想させる。物体の運動とでも呼べる意味場が見えないだろうか。

《移動》 繰返し歩を進めることは、走ることも含め、一般的には、目的(地)を持つ行動である。WANDER, STROLL, ROAM 等はそれとは異なる。ただ移動するだけなら MOVE, ある場所からは GO, 目的地からは COME と言われ、その際に何かを携えていると、それぞれ CARRY, TAKE, BRING となる。これらは足での移行だけでなく、その延長の乗物の使用をも含み、移行、移動に関する大きな意味場を見て取ることができる。

《滑走》 足に関する SKIP には、石を水面に弾ませ遊ぶ、水切りの意もある⁽¹²⁾。平面を滑るようで SLIDE, GLIDE などを連想させる。CRAWL, CREEP 等にもつながるか。水中や空中での漂流・浮遊、滑走などということになると、《振動》《移動》とはどのような関連をもつのであろうか。

以上、断片的なものも含め、いくつかの意味領域の輪郭を、どれも便宜的に名称を付して、指摘してみた。相互につながりのあるもの、より大きな意味場に吸収されるもの等、構造的意味論にとって重要であると考えられるけれど、詳細な分析は、これからの調査・研究に委ねられる。

注

- (1) 肉食獣でも想定すれば良いか。ここで言わんとすることは、むしろ鳥や魚を考えれば、より理解し易いか。
- (2) 頭脳の発達と並行すると考えられるが、手が器用になった結果、直立歩行になったのかもしれない。どの道、道具の発達はその後であろう。
- (3) 切断に関係なく、傷をつけるだけ、挟むだけの場合もある。
- (4) 余計なことだけれど頬袋についてはどう解釈するのか。
- (5) 拳を強く握ることにも適用される。ついでながら、後述の SNAP, NIP も口と手の両方に適用される。
- (6) 唇を閉じて、舌を上顎につけて、それぞれ SUCK すれば SMACK, CLICK となる。幼児をあやすのにも使われるか。
- (7) 後述の叩くことも含め、子供の喧嘩の種になる。
- (8) 内側に力を加える《握力》にも適用されえる。
- (9) 既述の HOLD, PUSH などと伴に、自分自身を対象にすることもある。
- (10) 既述の PUSH にもあてはまる。ついでながら、同意を表現するために、目的語として one's way を取る動詞群がある。
- (11) なわ飛びの skipping rope を連想させる。後述する片足 HOP の左右連続とでも言えないだろうか。ついでながら、三段跳びは HOP, STEP and JUMP あるいは HOP, SKIP and JUMP と呼ばれる。
- (12) duck and drake と呼ばれる。